

計画案の夢

アンビルト・プロジェクト

アトリエCOSMOS

'93~'95

①

鎌倉市立御成小学校私案

二次案

文=白鳥健二

写真=大橋富夫



鎌倉市立御成小学校私案 一二次案

—心を癒す空間、
遺跡を内包する学校—

私の住む鎌倉市では、10年以上も前から市民あつての、ある論争が続いている。「鎌倉市立御成小学校」という、市内でも1、2を争う伝統校の老朽化した木造校舎の改築の是非をめぐる一大論争である。

当時の市長はじめ、議会関係者、各界の専門家、マスコミ、さらに一般市民を巻き込み、大きく意見が分かれている。この木造校舎を将来とも活用しようとする「保存再生派」と、安全第一を基本とした耐火建築を望む「建て替え派」との対立の構図である。

保存再生派は、昭和初期に築造された由緒ある木造建築の城郭堂宇たる講堂の保存をはじめとし、兵舎形の配列で整然と建ち並ぶコロニアル風の木造校舎の歴史的価値（1985年、日本建築学会より保存すべき旨が鎌倉市に対して要請される）の重要性を強調。また、現代の小学校教育において欠かすことの出来ない木の温もり、古き良き時代の産物に対する限りないノスタルジアetc……を主張。一方、市教育委員会を中心とする行政、学区側、そして議会の大半は、建て替え派である。とりわけ子供たちを本校に通わせている父兄たちの多くは、こ



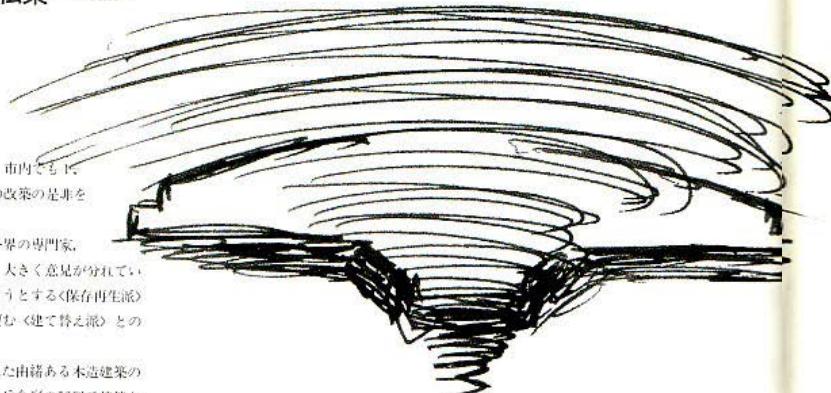
れに感している。

学者たちが認定する学術的価値もある程度理解は出来る、先輩諸氏の言うノスタルジアも分らぬわけではないが、しかし当時の若い母親たちとしては、そんな懐古趣味はともかく、安全でしかも立派な校舎を早くつくって欲しい、難しい抽象論もこの辺いい加減にしてもらいたいと、強く反対。両陣営の意見の対立は収拾されるどころか、論議の間口も広くても深まるばかり。この間、老朽化した校舎はますます庵屋と化し、この過酷な環境の中で毎日、子供たちは授業を受けている有様だ。当時の市長の決断力の欠如、行政の不在、そして他力本願の大多数の一級市民、草野門家であり、市民の一人である私自身のふがいなさも同時に痛感。「え~い、何とかならないのか！」

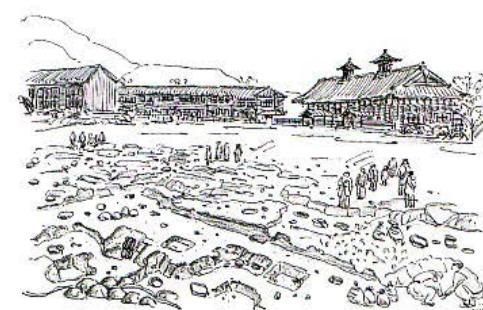
【天】

天のふくらみが、そのまま屋根のふくらみとなる、
天空のふくらみが、そのまま小学校の屋根となる、
ゆっくりと翼を広げた二枚の屋根は、学童たちを優しく内包する。

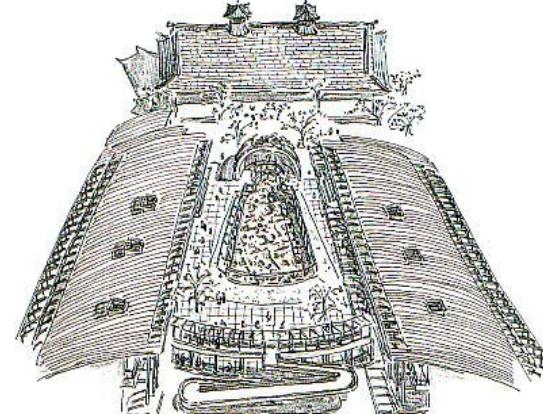
泥沼の論議の真只中、市教育委員会は突然RC造3階建の新しい校舎の設計を某設計事務所に発注。あっという間に分厚い設計図書が完成した。新校舎の着工を目前に控えて、四万平方メートルに及ぶ土地の試掘がまず行われた。埋蔵文化財の事前調査のためである。なんと、試掘が始まるとまもなく、校内のあちこちから古代、中世の重要な遺構が顔を出したので



△【天】
天と同調する、天の持つ円錐と同心円の屋根



△【地】
校庭のあちこちから、古代・中世の遺構が発掘された



△【天】と【地】の間
地底に別れた遺構を生き残りにする、天と地の間に小学校が誕生した

ある。まるで地上の我々のすたんなどをあざけ笑うか如くである。天の声か！ それとも地の声か……。

何はともあれ、「お声」が発せられたのである。この時を境に事態は一変。重要な遺構のすぐ上に巨大なコンクリートボックスが載かってしまう。これは一矢失である。

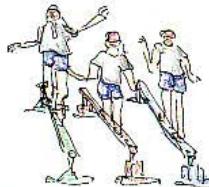
【地】

地の底に眠っていた過去が、そのまま現代に蘇る。地底に刻まれた歴史の痕跡が、そのまま小学校の「底」となる。悠々と広がった大地の遺跡は、御成小学校の原点となる。日本考古学協会の学者、専門家等は、発掘されたこの遺跡を保存し、史跡公園として活用すべきとして当時の文化庁官房、市長、教育長等に正式に要望。

実は敷地を含む周辺一帯は地盤が悪く、地震時には液状化を起しかねない状況で、RC造3階建での総重量を支えるために1100本程の杭を地中奥深い支持層まで到達させなければならないことになっていた。地中に眠る埋蔵文化財は、ハチの巣同然、穴だらけとなってしまう。教育委員会は、最初この事実を隠していたのであるが、間もなく周囲の知ることとなり、RC造3階建での立派な校舎の建設の夢は、この時一瞬にしてライとなってしまった。設計事務所に支払われた市民の税金も、ついでにライになってしまったのである。

【天と地】

天は未来、そして地は過去。天と地の間に新しい御成小学校が、今、誕生しようとしている。



過去と未来の間に今、新しい空間が発生しようとしている。歓びも、憎しみも混りあり、相反する二つの価値観が歴史の大地上に交えられ、優しいふくらみの下に内包されている。1994年7月、市民との対話による行政の立て直しを旗印に当選を果した新市長は、就任後小学校の立案を(財)日本建築センターに突然委託。「市民不在、独断潜行」と市民団体は抗議。学者を中心とした作業部会がまもなく結成され、基本構想案なるものが東京サイドで作成されたが、「その内容に重大な瑕疵がある」として、住民監査請求を提出。

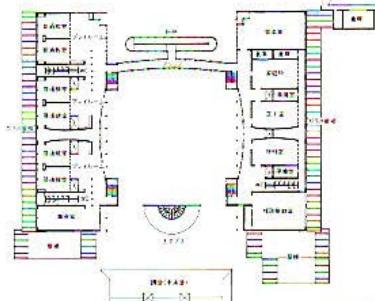
1995年9月、作業部会は協議会と名前が変り、ほとんど同じメンバーのもので既設復活戦が行われ、1996年1月、一つの案に至ったのである。

市民の反応もなく、マスコミ各紙のかつてのような論評もなく、議会関係者も、「もうこれでいいじゃないか……」と無気力、無関心。純木造による木造再生の十数年来の夢は消え、埋蔵文化財の上には鉄骨一部木造による混構造の巨大な小学校がどっかりと坐り込むことになったのである。そしてこの基本構想案は、その後、某大手組織設計事務所の手により、年内の「決着」に向けて猛スピードで実施設計化されている。

「一体何とかならないのか！」とのムシャクシャした気分をこの際、「天」へ向けてみた。そこには雄大なる天空のふくらみが……。地面からは太古の遺跡のメッセージが……。

「今、小学校に必要なものは何……？」と自分に質問をしてみ

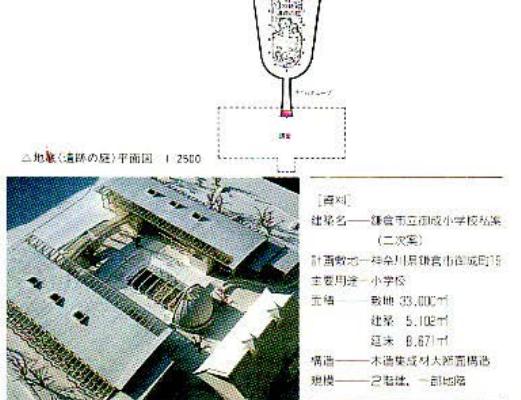
る。長らくの懸念が未だ得た答が本計画案であった。心を癒す空間、遺跡を内包する学校であった。新しいものが誕生するたびに古いものが再確認される、そんな思いを込めての計画案である。(白鳥建二)



△2階平面図



△1階平面図



△地盤(遺跡の底)平面図 1/2500



▲鎌倉市立御成小学校私案(二次案)模型

【資料】
建築名：鎌倉市立御成小学校私案(二次案)
計画設計：(財)奈川県建築士会在職15
主要用途：小学校
面積：敷地 33,000坪
建屋 5,100坪
延床 8,871坪
構造：木造筋組み大屋根構造
規模：一部地盤

JUTAKU - KENZUKU 199706 97